
シャーサクの冒険記

八石マムミラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シャーサクの冒険記

【Nコード】

N7513B

【作者名】

八石mamミラー

【あらすじ】

シャーサクと言う名の主人公が冒険する物語です。名前の由来はサクとシャーをくつつけただけ。設定では主人公は高校生

プロローグ（前書き）

ギャグ冒険物。しかし描写を骨の髄まで書きます。

主人公はシャーサクです。

冒険では草原や蜂の巣、ラピス火山などオリジナルな場所をどんどん出そうと思います。

コレを見たら続編のクラブの冒険記も見てください。

プロローグ

この世界はシャーサクのいた世界。
それは名探偵コナンの世界だ。

シャーサク「今日から高校生だ」

シャーサクは高校へ行く時だった。

そして高校についたんだ。

この学校は今日出来た場所。

そこで友達を作りたい所。

幸い僕には小学校の時の友達がいた。

そして学校の中に入った。

そこで謎の穴に僕は落ちてしまった……

シャーサク「い・・痛てて」

謎の穴の先にある文字を読んだ。

ここはテンミリオン、これを読んだものはほとんどの記憶を忘れる
であろう……

その墓の文章を僕が読んだ後
いくつかの記憶を失った。

今までのキャラバンと言うゲームの記憶、シフトアップネットの記憶、ミラクル族の記憶などを失ってしまったんだ。

そして今まで習得したほとんどの必殺技を忘れてしまった。
しかし、光の棘と光の茨だけは忘れずに住んだようだ……

そしてこの洞窟から外に出た時、広い草原が広がっていた――

広くたくさんの草が生えている。

空は綺麗なライトブルー。雲も白く綺麗――

黒い雲は無く、穏やかな所だ。

僕はシャーサク。他人には優しい事をする事が多い人間だ。

シャーサク「え！？ここはどこ！？」

ここは知らない場所。しかし少し見た事があるような気がする。
何故だ？

フッフ、冒険の始まりだ！

僕はこの広い草原を進んでゆく。

そうすると……

僕は疲れて倒れてしまった……

ここはどこだ……

僕はどうなったの。

誰かに殺されてしまったのか。

そんなわけは無いはず。

大丈夫――

そう音がした。

那遊「気付きましたか。」

そう僕にあの少女は言っていたのだ。

第1話 悪き魔法使い・セシル（前書き）

主人公は異世界・テンミリオンに来た
そして仲間に出会った。
その後の物語

第1話 悪き魔法使い・セシル

ここはどこだ。

洗練されている綺麗な部屋。

本も散らからずに綺麗に整頓されている。

あの少女はピンク色の長い髪を下ろしている。

そして目は紫で蒼いドレスを身に纏っている……

見るからに優しそうな少女だ。

シャーサク「ぼ、僕はシャーサクです。きみは誰ですか。」

那遊「わたしは燈火^{とうか} 那遊^{なゆ}ですの。魔術師で一人旅をしている。」

この子は那遊ちゃんって女の子だった。

かわいく名前も有っている。

那遊「近くにある集落に行くまでわたしはお供します。」

この女の子と冒険できるなんて。

僕幸せ♪

僕と那遊は旅を始める。

僕の冒険記始動だ――

スラッシュ「フフ……」

その事をスライムが見ていた……

そのスライムはボスの所にダダダと走っていった……

スラッシュ「ツドム様。大変です。」

ツドム「スラッシュ、何を騒いでいるのだ。」

こいつはツドム。草原を支配しているオーガー。

臭い足を持っており、装備している天馬てんうまの靴は凄く臭くなっている。高い魔法防御も持っている強力なオーガーである。

スラッシュ「この草原に2人の人間。魔術師って感じの少女が一人、そしてとてもない力を持っている男の子が一人。」

スラッシュはツドムに一生懸命はなした。

ツドム「フフ…。ヤバイな。」

ツドムは凄くやばそうにしている。

ツドム「セシル・フォルカード。その2人を倒して来い。スラッシュとスライルとスラップとウィスコとウィッス。セシルを護衛だ。」

セシル「わたくし。来ました。ツドム様。あの二人をチェイサーズするんですわ。」

この女の人はセシル。青毛でポニーテールにしている。右目を前髪で隠している。瞳は水色。

ツドムに雇われた若き女性。

特に男が嫌い。

好きな言葉はチェイサー（追撃者）だ

第1話 悪き魔法使い・セシル（後書き）

最終話のわけありませんから

第2話 海と氷の魔術師

その頃、集落に居た騎士・ブロントⅡアリバラン。
そいつは草原に向かった。

ブロント「草原で異変が起こりそう。きっとだ。魔物だらけと言う噂」

こいつこそブロントⅡアリバラン。

王子と言う肩書きも持つがそれは活用せず

王国の騎士団長と言う肩書きで生きている――

目的は草原でまものをたおし、仲間を入手したいからだ……

シャーサクたちの行動に戻る――

シャーサク「この世界はどうなっているの。」

那遊「ここはテンミリオン。魔王がいるらしくその魔王が動物と言う生物を実験などでスライム等のモンスターにしたのです。そのスライムたちがさらに進化してガーゴイルやオーガーみたいな強力なモンスターになったんですわ。」

も、モンスター。架空のキャラクターで悪い物が多い。純粋な性格らしいので悪に染まったら悪い卑怯で町を滅ぼす存在
良い心を持つ人間がゲットしたら悪者を倒す為の頼もしい仲間である。

そんなモンスターが居る世界とは僕は凄と思った。

那遊「このテンミリオンにはいくつかの大陸があるらしい。その大陸のどこかに魔王が潜んでいると思うんですわ。」

魔王。魔物の王で世界を滅ぼす者。
ますますシャーサクの冒険記って感じ——

那遊「これぐらいしか知らないわ。」

那遊さん。これで十分。
僕はこれだけの情報を大事にするよ。

この草原を進んでゆくと・・・
スライムのような物と宙に浮いている鬼火
そして魔術師の女がいた——

セシル「スライム、ウィスプ。やっておしまい。」

セシルと呼ばれる謎の魔術師は、その空中に浮遊するウィスプとスライムに
命令をし、僕たちに襲ってきた。

しかし、素早い動きでシャーサクが前に出た。右手を前に突き出し、
服の右側の腕を捲り上げ、
怒声のような声を敵へ上げる。

シャーサク「僕の殴りを見せてやる！」

そして僕は凄い勢いでスライムに走った。学校ではかったとき、僕は持久走では6分58秒。

遅い方であり、筋力は右28キロ、左24キロである。

かなりと言っているほど殴りの威力は低めである。これではスライムを殴っても

あまり効果が現れないかもしれない。

シャーサクは少しためらいを覚えた。もし効果が無かったとしたら、強烈な反撃が

繰り出され、大きなダメージを負うかもしれない。だがやってみなくちゃ分からない。

——それでも全力で殴ってやる!!

強い意志と共に拳に力を入れ、スライムに接近すると飛び上がり、力いっぱい殴りこんだ。

グニョ。

全力でスライムに殴ったが、変な感触が右手に伝わった。スライムはゼリー状で

出来ている。なので弾力性あるゼリーの体に対しては威力が無い。ダメージを当たるならば、刃物や魔法と言ったものしかダメだ。

次にはスライムが反撃に出た。しかしその行動を見切っていたシャーサクは

難なく反撃を回避すると、那遊ちゃんがいたところへ退いた。

そこへ那遊ちゃんが声をかけた。

那遊「武器無いの？。代わりにわたくしのこのローズロッドでスライムを倒すわ。」

那遊ちゃんはポケットから薔薇をモチーフにした美しい杖を取り出した。

もち手の部分は薔薇の茎をイメージしており、トゲトゲがある。いかにも痛そうに見えるが、

モチーフにしてある為、それほど痛いとかではなく、きちんと先端部分は丸まってあり、

逆に持ちやすいものだろう。そして杖の先はその名の通り本物に良く似た薔薇の花が取り付けられており、

より美しさを引き出している。

そしてなによりも杖で殴った時、魔法までの威力が高そうだ。

そして那遊ちゃんは素早くスライムへと接近した。そして彼女は線を描くようにしてそのローズロッドでスライムを、剣で一閃させるように

叩いた。パコンッ！という音が鳴り響いた。確実にダメージを与えたみたいだ。

それに思った通り威力は高い。

杖の威力も凄いけど、那遊ちゃんも凄い。スライムは回避も出来なかったし、

接近するスピードも凄かった。シャーサクは感心していたが、スライムは消えることなく

フヨフヨと少し動いていた。

スライル「まだ。力が……」

スライムはまだ生きていた。このスライムは普通じゃない……みた

いけど、

もう戦える力はあまり無いみたい。確実に倒すなら今しかない！
そう思って2人は一斉に攻めようとした瞬間、何かが音がした。

ウィッス「ボオオオ『炎』」

別の方向にいたあのウィスパが僕に炎を飛ばしてきた。僕はそれに
気がつかず
もろに直撃してしまった。

シャーサク「あっつーーい」

凄く熱い、やけどした。皮膚が黒ずんでいて、見ると気持ちが悪いくらいだ。

プチン……

僕は堪忍袋の緒が切れた。もう怒った。許さない。本気でウィスパを殴ってやる。

シャーサク「殴っちゃうもんね。」

怒りのあまりにシャーサクはウィスパへと急接近し、殴りかかった。

那遊「あ！ダメ！素手でウィスパに攻撃すると・・・！」

那遊ちゃんが声をかけたが遅かった。既にシャーサクはウィスパに殴ってしまった。

ウィスパは鬼火。燃えている為手を火傷してしまった。

熱い、痛い。そして辛い。

痛みとやけど、この二つがシャーサクの体力を奪い、さらには辛さが精神的に

ダメージを与える。でも負けられない！

スラップ「スラスラ。コロスゾ：」

別のスライムがシャーサクへと近寄り、おぞましい声で揶揄するよう
に言った。

シャーサクはその声を振る切るようにして身構えた。

シャーサク「光の棘。試してみるか！！『光の棘』」

光の棘を出す魔法を唱える為、僕は詠唱をした。無詠唱なので
時間がかからない。なんと便利な魔法だと、自分で感心した。

そして僕は無数の光の棘を空間から出現させた。その光の棘は瞬く
間に八方に飛び散り、

スライムやウィスを蜂の巣のように刺した。相手は悲鳴をあげ、
バタリと倒れたりプシュウと消えていった。

後に残った敵はスライム1体とウィスプ1体、そして女性1体ぐら
いになった。

セシルは身構え、何かのポーズを見せる。それが何なのかは僕には
分からないけど、検討がつくのは一つだけ。何か強い攻撃をしてく
ること。

これだけ僕は敵を一気に倒した。そうとう相手は怒りに満ちていて、
仇を討とうとでも考えているのだろう。そのお陰できっと強い攻撃
に違いない。

そして謎の魔術師、セシルが声を上げる。

セシル「よくもやりましたわね。わたくしの技を見せてやるわ『アイシクルエッジ』」

呪文の名前を叫ぶと、突然回りが暗くなり、周りが白くなってきた。その白い物はそれぞれ一つになり、氷柱となった。それも数え切れないほど沢山ある。

――思った通りだ！

シャーサクは背中が凍ったかのように冷たくなった。まずい。これでは大ダメージを受け、致命傷、それとも死んでしまうかもしれない。

そして氷柱は数秒経つと、僕達へ襲い掛かってきた。

第2話 海と氷の魔術師（後書き）

シャーとサクを反対にして出来る言葉はサクシャーだ。

忍者は聖なる者。悪い魔術師は酷い者だ。ニユの力覚醒（前書き）

沸けわからないストーリー

今までのあらすじはお送りしません

ラブコメな部分もコナン系キャラも登場するかもね

忍者は聖なる者。悪い魔術師は酷い者だ。ニユの力覚醒

沢山の氷柱が現れ、僕らを襲ってきた。

シャーサク「ぐっ」

那遊「杖で守るっ」

僕は守る物は無く、大ダメージを受け、那遊ちゃんはローズロッドで守った。

隙が出来てしまった。

ウイスコ「うずまき炎のナルト攻撃。『炎』」

炎が襲ってきた。

うずまきナルトな言葉ジャン

NARUTOじゃないか

那遊「ぎゃあああああああ」

那遊ちゃんにダメージ。

炎は恐ろしい。

シャーサク「ならば・・・『光の棘』」

この光の棘ならウイスコ程度は倒せる！

スラッシュ「僕がウイスコよりも先に攻撃受ける毛利蘭！」

あのスライム、僕の攻撃をウィスコに使ったのに、守る。
このモンスターたちには知性もあるの・・・
でも両方倒せたから良いか。

セシル「あんたを倒しますわ。小山のようね。ウフフ『ハリケー
ンアロー』」

小山のような一撃かもしれない。

なんせ小山って恐ろしい言葉だな。

短距離的などころから敵が僕に矢の力を持つ攻撃。

ヤバイっ！――

那遊「このわたくしの技で攻撃を打ち消してみるわ。カカシになっ
てね♪『桜花旋風』」

桜の花びらを風に乗せて、風が敵の攻撃から守ってくれた。

さらに敵が惑わされているみたいだ・・・

セシル「よくもここまでわたくしをカカシにするなんて。はたけも
許さないですわ！『ブリザードストーム』」

敵は豪雪の吹雪を起こし、周囲を凍えさせ、なおかつこの攻撃を受
けたら動けなくなりそう。

ニュウー、ニュ。

敵は小山セシル、ならば・・・
許さない。僕の怒りのニュの力を見せてやる！！

シャーサク「フフ……。ニュニュ『ニュパンチ』」

僕はニュって敵のブリザードストームを殴り、消し飛ばした。

セシル「ぐっ、ひとまず退散よ。実は俺、性転換し女性化した男だ」
相手の女性は逃げていった。

シャーサク「はぁあ…はぁ…」

もうだめ。何が起きたんだ。

あの強力な技は何なんだ・・・

那遊「凄すぎですね。ニュパンチ」

ニュパンチ？

なんだ。僕わからない。

そんな技とか知らない。多分技だとはわかるけど。

こんな事は。この技は記憶に無いのはなぜだ・・・

忍者は聖なる者。悪い魔術師は酷い者だ。ニユの力覚醒（後書き）

このページは短かったです。
すみま

第4話 モンスター軍VSシャーサクチーム

シャーサク「気を取り直してどんどん進もうっ」

那遊「シャーサクさん。大丈夫ですか……」

那遊ちゃんは僕に気を使ってくれた。

——それはかなり嬉しかった。

あの戦闘で僕はダメーじ。動きもまだぐら付く程だ。

シャーサク「光の棘はやっぱり凄いなあ」

光の棘は威力が高め。

棘が四方八方に飛び散り、スライムやウィスを簡単に倒したから

——

光の棘ともう一つの技しか今は使えない。

だが技と言う物が強力だろう。

僕は那遊ちゃんと進んでゆく。

そこには、スライムとウィスが居た。

スラスラ「プニュー」

スライム、体に触れても酸で溶けてしまったりはしない。

そして体はゼリーのような……

だが、弾力性があり、パンチはあまり効かない。

細い物で刺す攻撃はあまり効かないが棍棒攻撃、刃物の攻撃などがよく効くようだ……

ウイスラム「ボオボオ」

ウイスプ。鬼火モンスター。やっぱり殴れば手が焼けどしてしまう。炎の攻撃の威力は高く強敵。人間で言う魔法使い系だと思われる……

シャーサク「光の茨。この技を試してみよう」と『光の茨』

こ、効果が無かった!？
なぜだ。と考えた

それは詠唱を放っていないからだ。

——詠唱は光よ、茨となれ。

脳裏にその言葉が浮かんだ。

この技は詠唱が必要なんだと。

シャーサク「この技の威力はどうかなあ。【光よ、茨となれ】『光の茨』」

空間が切れ、光の茨が出現した……。その茨がスライムやウイスプを包み込む。棘がついているので棘が敵らを食い込む——気がつくともスライムやウイスプはボロボロになった。

そのスライムやウイスプは戦闘不能。瀕死。全ての力を振り絞り、逃げていった……

ツドム「グアアア。よくもやったなあ」

僕たちは草原進み、スライムやウィスピを倒した。
そして瓦礫の門を進んでゆく。

空は光が光線のように出ていて暖かい――
そこを僕たちが進んでゆく。

あれはまさしく……

ツドム「うがああああ」

――オーガーだ……なんとも大きい。
オーガーは知能数が低いはず……
だから戦い方によっては勝てるはず。

シャーサク「那遊ちゃんは攪乱して杖で攻撃。僕はパンチで戦う！」

那遊「わかったっ！」

那遊ちゃんは走り、オーガーの所に行った
オーガーは何もしていない。
チャンスだ！！

那遊「私の強力攻撃いくよっ！」

那遊はローズロッドで思いっきり攻撃。
しかしオーガーは攻撃を防御した……

なにい。知能が低いはずなのに

【防御をすると言う】知識を持っているのか。

ツドム「おれは…そして早い！」

オーガーは羽の付いた靴を装備しており、他のオーガーよりもとても速いようだ

オーガーは走って、そして…斧で那遊ちゃんへ攻撃。那遊ちゃんは杖で攻撃を守った。

そしてツドムと名乗るオーガーは超スピードでシャーサクへ襲ってきた！！

僕には武器や防具は無い。
服は固めな緑目の黒い服、そしてコート。
防御力は皆無だ。

シャーサク「使いたくなかったんだが『光の棘』」

空間から光の棘をいくつか出現させた。
それらで攻撃してきたオーガーの斧の攻撃を食い止めた。
この隙に僕は攻撃を避けた。

シャーサク「ダメだ……。本気じゃなきゃ殺される！」

ツドム「まだ20%も俺の力は出していないんだぜ」

20%未満の力に押されている！？
ヤバイ。本当にヤバイ。

殺されるーーーーー！！

那遊「ダメージを与える事は出来ませんがこれはしなきゃいけません

んね。『桜花旋風』」

沢山のさくらの花びらが現れ、それらがオーガーを襲った。
この花びらは攻撃には移らず香りを多く出した。

ツドム「桜綺麗だ。」

敵は眼を眩ませている。チャンスだ！

僕はこぶしに力をためて突撃。

那遊ちゃんはローズロッドで思いつきり攻撃

ツドム「ぐっ『治癒』」

バラの棘でオーガーには怪我を負わせる事が出来た。

そのダメージは予想よりも大きかった。

しかし……

傷口が直ぐにふさがった。こんな回復力を持つ魔法を持っているとは……

ただでさえ絶望的なのに。

那遊ちゃんの最強の技とかあるのかな。

なきや勝てないと思う。

ブロント「オーガーに苦戦しているな。俺も戦おうー『メガスラ
ツシュ』」

そこに金髪の白騎士が現れた。

金髪を1つに束ね、白い鎧と青いマントを付けている。

剣を持ち、オーガーへ横に切り裂いた

その人はいたい……

第4話 モンスター軍VSシャーサクチーム（後書き）

シャーサクが勝利できるかどうかが見所でしようね。

第5話 ブロントの実力

——凄い。2人でこんなに苦勞したオーガーに一人であんなダメー
ジを与えるなんて。

ツドム「このツドム様の本気で前らを殺してやる！」

オーガーに名前があったの。

ツドムと言う名前らしい。

タケシの父もツドムだと思ったがムノウなんだよね。

ブロント「俺はブロント。今は戦う時だ。一緒にツドムを倒そうぜ」

シャーサク「ブロントくん。凄い♪。僕も本気で行かなきゃ。」

那遊「やっぱり私はずっとシャーサクさんについていきますわ」

3人で話していた時、ツドムは斧で思いっきり攻撃してきた。

ブロント「いきなりか！『シュラッシュ』」

ブロントは剣に風の力を包み込み、それで斧を弾き飛ばした。

ツドムは隙を見て投槍をブロントに投げる。

ブロントは大きい隙が出来ていたので攻撃をモロに食らった。

ブロント「ぐっ」

かなりの深手を負ったようだ。

傷から血が多く流れる程のダメージ。

那遊「回復します。【風の精霊達よ。優しい風を振らせて……】
癒しの風』」

聖なる風が吹いてくる。

それがブロントを包み込む。傷はみるみる消えてゆく。

那遊「はあはあ」

かなりの気力を使い果たしたみたい。

僕はまだ気力タツプリある。

気力を移すような魔法があると便利だろうと僕は考えた。

ツドムはスピアの鉄で出来た斧を取り出した。

ツドム「バトルアクスは失ったがまだ、この武器はある。」

鉄で出来ているため威力は高そう。

それが疲れている那遊へ襲い掛かった！

シャーサク「あぶないっ 【光よ、茨となれ……】 『光の茨』」

空間からたくさんの大きい光の茨を出現させた。

それらが那遊ちゃんを守り、ツドムに包み込む。

ツドム「ぐっ。無防備だ……」

シャーサク「いまだ……。炎系の剣技とかが有効そうだ。ブロント」

ブロント「いくぜえええー！ 【無数の炎よ、剣に宿り、巨大な炎と

なれ】『ナベィブレーカー』」

ブロントは呪文を唱え、無数の小さな炎を出現させた。
それらが剣に包み込み、そして巨大化する！
その剣でツドムに襲い掛かる！

ツドムは光の茨に包まれ、無防備だ。
そのツドムに炎の一撃が決まる！

ツドム「ぎゃああああああああ！」

なぜかツドムに空間の亀裂が入り、消え去った。
特殊なモンスターの死に方、もしくは強力なモンスターの死に方か。

これで草原の敵は全て倒した――
この先に何が待っているかは知らない。
しかしもっと過酷な戦いが待っている事を……

第5話 ブロントの実力（後書き）

更新スピードはまちまちだけどまだまたヨロシクね。

第6話 新章突入。集落への道

僕たちはどこに行けばいいんだろう。

フロント「俺、集落に行くといいと思う。すぐ着くはずだからな。」

フロントありがとう。集落へ行くぞおー。

シャーサク「ゲッ、モンスターが襲ってきた」

フロストフワルが2体、炎黒人が1体、槍兵ケヤリが1体にヒールスライムが2体の計6体

特にフロストフワルは強敵だ……

ふわふわしていて空を飛んでいる上に攻撃が当たりにくい。

氷の息の威力はかなり強い。

炎黒人は攻撃力が高そう。更に体力も多く有りそうだろう……
他にもヒールスライムは他のモンスターを回復してくる強敵。

シャーサク「詠唱も無いこの技でダメージ♪『光の棘』」

僕は空間から無数の光の棘を呼び出した。

大量の光の棘がフロストフワル達を四方八方から乱れ攻撃。
かなりの傷を負わせた。

フロント「剣技は投げる事も出来るんだぜ、剣技の応用技だぜ!!
!【吹雪よ、巨大な氷の剣となり敵を滅却せろ】『ドゥース・ネス・
コールドブレード』」

フロントは剣に巨大な吹雪の氷を包み込ませた。
だがこの氷と剣を分離させる……

フロント「氷い、あたれえー……」

フロントはこの巨大な氷を思いっきり炎黒人に投げつけた。
効いている。氷には弱いようだ。

知能数も低めなので防御とか余り出来ないみたい。

炎黒人は倒すことが出来た。

ヒールスライム「ビキー『フアイアー』」

あのヒールスライム、小さめの炎を作り出し、それを発射してきた。

那遊ちゃんに当たってしまった。

手が少し水ぶくれしたみたい……

いたそう。

那遊「よくもやったわね。一撃で倒しますわ」

那遊ちゃんは思いっきりローズロッドでそのヒールスライムに攻撃。
倒せなかったが大打撃を与え、プシュ、ピタッと小さな血が所々から出る……

ヒールスライム「ピキィ『ヒール』」

ヒールスライムB（2匹目のヒールスライム）はヒールスライムに
回復魔法

傷口は消え去り、傷が治ってしまった。

1体目のフロストフワルは冷たい息。冷たいがほとんど無傷。
だが……

フロストフワル「フワフワ『氷の息』」

僕達3人が凍りついた時、ケヤリ虫野郎はブロントに槍で攻撃

ブロント「ぎゃあああああ」

ブロントの急所を突いた。

致命傷な大ダメージを受けてしまった。

ただでさえ、凍っているのに。ヤバイっ

那遊「今こそ回復の時ですわ。未来を信じよう♪『癒しの風』」

安らぎの回復の風が吹き、僕らの傷、氷を消し去る。

かなりの回復力だ……

シャーサク「詠唱を改造すれば強力になる？【光よ、巨大な茨となれ】『光の茨』」

——僕は力をこめた。

空から巨大な1本の光の茨が出現

——ドシンッ

光の茨は2体のフロストフワルを潰す。

2体とも巨大な茨によって消滅した。

残りの敵はヒールスライム2体と槍兵ケヤリ。

槍兵ケヤリは思いっきり飛び出してブロントに襲い掛かった！

ブロント「水系モンスター。弱点は電気『稲妻ブレード』」

その攻撃を避け、すぐに稲妻ブレード。

剣に稲妻に宿らせ、そして斬りつけた……

一撃で真っ二つになり、消滅した。

——後はヒールスライムだけだ！

ヒールスライムは2体とも突進。

那遊ちゃんはロッド、ブロントは鉄の剣で攻撃してダメージを与えている。

トドメの一撃を放ってやるよ

シャーサク「光の棘。詠唱無くても使えるがあった方が威力が増す

！【光の棘、出現せよ】『光の棘』」

空間からちよつと大きい光の棘が無数に出現

四方八方に飛び散り、ヒールスライム達に猛スピードで襲い掛かる。数が多く、ヒールスライム達は消滅した。

戦いが終わると一つの銅の剣が落ちていた……

シャーサク「武器、武器」

僕は武器をゲットした。

素手じゃ威力が無く、武器は必要不可欠。

冒険は大きく楽になる……

第7話 集落、新たな仲間（前書き）

文字数が足りないので付け足しました。

第7話 集落、新たな仲間

どんどん進み、集落に来た。

シャーサク「ここは集落か。」

この集落は集落にしては少し広かった。簡素な武器屋もあるほどである……

506文字で書かれた本を読みながら600文字以上の本が売っているか探している時に一人の女に出会う事となった……

サクラ「あたしは雪原 桜。この集落にスライム群が襲ってきた。多分近くにあるスナの森のスライムのはず。」

この女性は凄く綺麗だった。

まっ、僕は可愛い那遊ちゃんの方が好みだけどね。

白い肌が魅力。

シャーサク「この森でスライムを退治すれば仲間になってくれるかな♪」

僕は話した。そして――

サクラ「快・感♪、お前と一緒になら得だと思うう。スナの森で戦い、その後仲間になるつもりでいようっ。」

僕は新しい仲間？

サクラさんを仲間にした。

シャーサク「こういうキャラに限って殺されたりして？」

サクラ「死なないわ。」

僕は集落を探索した。そうすると綺麗な本があった。

この本はシャーサクにしか読めませんと書かれていた。

僕はシャーサクだ。多分読める。

シャーサク「どれどれっ、弱そうな技ばかり。一つだけハカイ・コーセンと言う強そうな技があるけど……」

この本にはたくさんの技が載っていた。

ほとんど弱すぎな技ばかりに感じたが

いや、ハカイ・コーセンが一番弱そう……

なぜならただの光線と言う意味としかない。

何とかビームの方が強いと思う

第8話 シャーサクの散歩（前書き）

この話は番外に近く、あるアイテムを拾ったシャーサクが散歩して雑魚モンスターに腕試しする。

第8話 シャーサクの散歩

仲間達は少し休んでいる。僕は一人だけで少し周りを探索。宝箱があるかもしれないから。

そうすると……

フレアスライム1体とヒートフワル2体、そして毒キラビーが3匹襲ってきた。

シャーサク「僕一人なのに。まっ、一人で来たから自業自得だ『炎の香』」

敵は炎タイプ多いがキラビー系は炎に弱め。

良い香りを多く出した。

毒キラビー2体とフレアスライムはこのニオイに追ってくる。

そして……

炎を呼び出し、炎で包み込む。

毒キラビー2体は燃え去った。

フレアスライムにも結構効いている。

毒キラビー「キー『毒針』」

猛毒がベタっとついた針が僕を襲う。

しかし防御技もあるはず。

シャーサク「攻撃からはこの防御技で守る『精霊氷壁』」

本で探したが防御技はこれ一つしかなかった。

巨大な氷の壁が出現し、毒針は凍りついた。
壁は消え去った。

ヒートフワル「ぶわぁー『火の息』」

2体のヒートフワルは同時に火の息を吐いてきた。
これぐらいの攻撃。この本の攻撃技で消し飛ばす！

シャーサク「さすがにこれなら便利そう♪『フリーズエアー』」

僕はこの技を使った。

冷たい空気を発生し、敵たち全員を包み込む。

炎系の敵には効果抜群。毒キラービーの急所をつく。

そして敵全員を凍らせ、氷は割れ、中の敵たちも一緒にばらばらになっ
て消え去った！

僕は集落へ戻った――

――その戦いの最中にスライム軍が襲っていたのだ。

第8話 シャーサクの散歩（後書き）

次回は迫力的。大バトル。

第9話 スライム軍の襲撃 巻の一

ここは集落。わたくしたちはここにいるのですの。
シャーサクさんがどこかに行っている中、危険だからここに襲ってくる魔物たちを倒しているの。

スライムやスライムベスが沢山来ましたですわ。

スライム達は弱かった。本気とかは出さなくて済んだ。

スライム「いけえー」

スライム6体とスラベス5体とヒールスライム2体が襲ってきた。

ヒールスライム「ピリリーキー」

あのヒールスライムは何かを呼んだ。

そうすると新しいヒールスライムが現れた。

ただでさえ、多いのに。

サクラ「一気に敵を倒すこと。すなわち快感『染井吉野之舞早朝』」

そめいよしののまうそうちよう
染井吉野之舞早朝。どんな技ですの。わからない。

雪原さんは鉄製の扇を無数に飛ばし、四方八方よりスライム達を襲う…

そのスライム達に思いつきグッ刺して大量の血が流れてゆく。

スライム達を一気に全滅させた。

その頃、スナの森では……（ベスナ視線）

ベスナ「ティセナ様。弱きスライムの青年では殺されてしまいます。強いスライム2匹はどうでしょうか。」

ティセナ「強いスライム……。ハアア。それでも殺されるじゃないか。コノヤロー」

ティセナ。まぢやまぢやそつくり。

——なら私に行けとか言うの…

ティセナ「雑魚スライムベス&ヒールを結構投入。そしてビードルルーラーを1体連れて来た。化石から復活させた。」

ビードルルーラーね。強そうな名前。ドラゴンルーラーのパクリだ
と思うけど——

スライムベス、ヒールスライム、そして大きいスライムに化けたビードルルーラーで集落を襲う。

平和の方がいいけど人を倒しまくらなきゃいけない。

命令に反したら殺されるから……

（那遊視線）

わたくし達はシャーサクさんを待った。

まだきていない。

そして謎のスライムと7体のスライムベスと5体ヒールスライムが出現した。

スライムベス「スラー」

ヒールスライム「ビキー」

数が多いが雑魚だらけ。

謎のスライムが気になる……

ブロント「俺のこの電撃魔法でいくつか消してやる！『ツイン・サ
ンダー』」

ブロントは2つの電撃を呼び出し、それらが合体。
その電気がスライム達を消し去る。

残ったのは謎の奴1体にヒール1体。ベスが2体だ

サクラ「ウリヤー」

雪原さんは鉄製の扇をロッド状にしてヒールスライムに殴りかかっ
た。

ヒールスライム「……………スカ…ルト……………」

あのヒールスライムは魔法を唱えた。

小さなバリアに雪原さんは弾かれた。

サクラ「ぐっ」

スライムベス「びきいいー」

スライムベス2体はわたくしたちに襲いかかった！

フロント「真系の剣技だ『はやぶさ斬り』」

スライムベス「プシュウウー」

スライムベス達はフロントが斬り倒した。
赤緑の血が流れ、消滅した。

サクラ「扇状にして攻撃よ」

ヒールスライムを雪原さんが攻撃。
プシュウと言う音と共にヒールスライムは消え去った……

後はあの大ボススライムだけですわ。

第9話 スライム軍の襲撃 巻の二（前書き）

第9章の続き。

第10章ではありません。

第9話 スライム軍の襲撃 巻の二

相手は謎のスライムが1体のみ、こっちは3人。有利な状況だ。

??? 「ジャリ、ジャリ『ミサイル毒針』」

スライムはいきなり沢山の小さな毒針で攻撃してきた――

――何故、スライムのはず……

サクラ「攻撃はかき消す。『染井吉野之舞早朝』」

雪原さんは無数に鉄製の扇を飛ばし、ミサイル毒針と相打ち。スライムを切り裂いたが威力は無い。

ブロント「もしかして、このスライムの姿は攻撃のダメージが殆どなくなる魔の布で出来た物かもな。俺は風魔法とか無い。風を操れば……」

わたくしならば風を使えるはず……

この新しい風魔法を使ってみる！

那遊「これで倒せるかなあ『刃吹雪風』」

わたくしは小さな刃のような風を吹雪のように、敵に襲いかけた！敵には効果が無く、少し切りつけただけ……

ブロント「さすがに威力不足だ。もっと強い技」

わたくしは攻撃しようとした。

——しかし、相手が攻撃してきた。

その攻撃は飛び上がり、突進してきた。

私達3人は攻撃をかわしたがもし当たってしまったら骨折じゃ済まされなかっただろう——

サクラ「ウリヤアアア」

雪原さんは思いつき、扇で風を出した。

わたくしのこの風技以下の風なので効果は無い。

——わたくしの必殺技ならば

そう、わたくしの編み出した必殺技。セシル・フォルカードと名乗る魔術師が使ってきた攻撃技が強く、攻撃手段が殆ど無いわたくしはやばかったんですの。

その後がんばって作ったこの必殺技。ローズ・ストームならあのスライムの正体がわかるかもしれない。

この魔の布を消し去れば……

那遊「私の必殺技をみせてあげるんですわ！『ローズ・ストーム』」

わたくしは大量のバラの葉が入った巨大な竜巻を呼び戻した。

それがスライムに遅いからいい——魔の布を消し去る。

もしかして毒キラービーよりもランクの強い虫？

思いもよらない敵が現れた――

ビードルルーラー「ダダダン。ブーン」

其処に現れた魔物、それはビードルルーラー。

古代の虫で邪悪な力を持つ。ドラゴンルーラーと比べてかなり弱い。だが、虫族ではトッククラスの实力を誇る

ブロント「あれはまさしくビードルルーラー。古代の虫だな。」

ビードルルーラーって何だ。

那遊「なんなの？」

ブロント「詳しくは知らないが幻の虫。高い能力を持つらしい。ドラゴンルーラーよりは断然弱い元締クラスのモンスターらしい」

ブロントさん知らないとは……

特に強い技のオンパレードなら倒せるがそれまでは使いたくない所。

サクラ「この素早い槍のような攻撃！『昼間之奇妙訪問者』」

ひるまのきみょうなぼうもんしや
昼間之奇妙訪問者

この技はどんな技ですの…

雪原さんは飛び上がり、そして素早く降りる。

その後素早く何回もロッド状にした武器で刺しまくる。

防御力は曹長の中間レベルと同じぐらいしかないので高いダメージで大きく傷を付ける事が出来た。

しかし黒い粒のある緑色の液体が流れ出る……
どんな効果が有るかは不明。

どろどろと地面を溶かしてゆく。
それが雪原さんを襲った。

サクラ「着物が……」

着物はシューと音がして溶け出した。
強い相手だから一撃で倒すしかない。
液体が増えてもヤバイから……

フロント「一気に消し去る『疾風の剣・シュラッシュ改』」

詠唱をせずにフロントは思いっきり攻撃。
時間が無いのだろうか……

ビードルルーラー「コンラン……ブイーン『混乱の針』」

混乱と密かに良い、混乱の針がフロントを襲う。
フロントは虫に素早く3回も斬りつけたが液体がブシュと出て白い
鎧は溶け、針がその耐久度や強度が低い鎧を抜け、フロントに当た
ってしまった。

那遊「フロントおー。」

那遊の声もむなしく、フロントは混乱した

フロント「エネフニャ。クロスゾ……『はやぶさ斬り』」

第9話 スライム軍の襲撃 終結（前書き）

第9章終了

第9話 スライム軍の襲撃 終結

ブロントさんは私や雪原さんへ攻撃してきた。
しかし失敗した。

那遊「混乱も回復する！『癒しの風』」

私のこの技。ダメージだけじゃなくて状態異常全て回復。
だから必殺なのですわね。

ブロントさんに癒しの風が包み込み、傷を癒し、状態異常を直す…

ビードルルーラー「こ、こしやくな……」

敵はのしかかってきました。

雪原さんに当たったんですの。

サクラ「ぐっ、あバラ骨、その他多く骨折」

仲間が骨折。これまではわたくしの癒しの風じゃ直せない…

ブロント「俺はブロント㍡アリ balan。風剣士と電撃魔法の使徒だ
：『サンダーネット』」

電撃のネットがドラゴンではなくてビードルルーラーに襲う…

ビードルルーラー「ビィーイー『ミサイル毒針』」

敵は攻撃を消し去るつもり……

勿論消え去った。

サクラ「骨は血で出来ている。てめえをあたしが吸収してやるからな…『世界破滅後之晩酌』」

雪原さんは敵に何回かロッド状にして殴った…

その後、思いっきり噛み付き、血を吸い上げてゆく…

ビードルルーラー「ギュルルルルル」

かなりのダメージを受けてゆく…

これで敵は倒れるはず！

ビードルルーラー「グゴゴゴゴ…『ポイズンスプレー』」

敵は強力な毒のスプレーを周り全体に思いっきり吐いてきた。

このダメージは高く私達に大ダメージとなってしまった…

那遊「キャーーーーー…」

わたくしは思わず叫んでしまった

これだけの相手じゃ少しの事では倒せないのはわかっている。

今は全員に癒しの風で毒を消し去る時

那遊「毒を消し去るのですわ『癒しの風』」

わたくし達に癒しの風が包み込み、傷を癒し、状態異常を直す…
この威力は高く、全てのダメージは消え去った。

那遊「力はもう無いですわ。これに全てを賭ける…『茨の風檻』」

茨と風が四方八方から無数に敵に襲い掛かりました。

そして敵を包んだ後、敵は茨で大ダメージ。

敵には随分なダメージを与えました。

那遊「ブロントさん。トドメですわ!」

ブロント「わかっているって」

ブロント「この新技を見せてやる『爆風・シュラッシュ・ソード』」

ブロントさんは爆風のように思いつきり助走。

そしてビードルルーラーに剣で突き刺した。

敵がぎゃあああああと叫んだ…

更に7回連続で風の斬り攻撃を放って、敵を完全に倒すことが出来た。

敵は蜂蜜を落としましたわ…

シャーサク「ただいま。」

ブロント「お帰り、あいつ君。」

那遊「シャーサクさん。お帰り」

サクラ「快感しました。」

シャーサク「那遊ちゃん、ブロント、そしてせつげん。ありがとう」

サクラ「あたしはせつげんじゃない。ゆきはらです。」

雪原さんはやはりこんな事をいいましたわね。

でもわたくしもせつげんと描写で言っているのよ。

わたくし達はスナの森に向かう：

第10話 スナの森

僕達は向かう……

スナの森に

シャーサク「いっくよおーん」

僕達は進んでゆく。

其処にヒールスライム2体、スライム3体、スライムベスが襲ってきた。

ブロント「俺の本気を見せてやる『シュラッシュ』」

風のようにブロントはヒールスライム2体を斬り殺し、消し飛ばした。

スライム「ビキィー『酸性粘液』」

スライム達が酸性の粘液を出してきた。

僕達は避けたが那遊ちゃんは避け切れなかった。

ベスナ「貴方達を倒します。このスナの森に襲ってきたから…」

シャーサク「お、お前こそ人々を襲ってきただろう。倒さなきゃ」

ベスナ「平和に暮らしたいだけなのに……」

那遊「どうして襲ったの。平和にならないですわ。」

ベスナ「ベス、スライム、やっておしまい。私の平和の為に…」

ベスとスライム×3が襲ってきた。

シャーサク「オリキャラの書。これで一撃だ『シューティングスタ
ー』」

流れ星を降り注ぎ、敵を攻撃した。

ベスナ「ボ、ボスの技と同じ!?!」

ティセア「俺の技と同じ物使うなんて…うざいんだよ。ククク、俺
の真の力を見せてやる」

こいつの真の力は何か、悪い予感がする・・・
僕にはこの状況はヤバイ、本当に

シャーサク「本当に厳しいぞおー」

この新しい攻撃法、大きく制限がある。
これをばれたら勝負にならない。
本気で戦えば僕が勝てるかもしれない

シャーサク「こおっちゃえ『絶対零度』」

僕は冷氣（－100度くらい）のかたまりを作り出した。
白き煙が立ち上げる・・・

この氷を敵に投げる。

ティセナ「ふん、この程度の攻撃は消し去る『シューティングスタ
ー』」

流れ星が降り注ぐ、その攻撃は消え去った・・・
まっ、これぐらいは予想できている事だ。

シャーサク「このときを待ってたんだ。『光の棘』」

詠唱破棄で光の棘を唱えた。本来詠唱を必要としない便利な魔法。
詠唱が有ったほうが強いが早く唱えた方が良い事も多い。

——光の棘が空間から出現する

この一撃が決まれば敵を倒せるかもしれない……
いや、無理だ。だが大ダメージを与えられるはず。

光の棘は四方八方と飛び、そしてそれらが全て敵にむかって襲い掛
かる！！

ティセナ「ぎゃああああああああ！！！」

僕は全力速。短距離100m。8秒40の速さを見せてやる！
僕は全力でティセナに近づく。

シャーサク「速さを生かしたこの大技を見せてやる。『靈魂疾風斬』
」

僕は短剣で攻撃をする。
超スピードでティセナを襲い、短剣で切り刻む。

ティセナ「隙大有り、短剣じゃ切り刻めないぜ。ばーか」

しまった。この技は隙が多く、短剣は威力が低い。

こんな盲点があったとは・・・

第11話 シャーサクVSティセア（前書き）

現在、本作はとあるサイトで作成中。

第11話 シャーサクVSティセア

しまった。隙があつたなんて。

僕はティセアにやられそう、いや、まだオリキャラの書の力をフルに使える大丈夫だ。

ティセア「お、終わりだ！『暗黒乱舞斬』」

シャーサク「仕方ない。これの力を全て使うか。充電すればまた使えるし【オリキャラ達の力よ。高き力となり、敵を撃て、強い技の力は神々を超え】『源斬』」

僕はオリキャラの書の中でも特に強そうな技の一つを放った。

空間振曲 ツクヨミ、The abyssなど一撃で倒せる技はこのオリキャラの書が充電満タンではない為使用できない。

それだけの大技を使えないからその一つしたの位の大ダメージ技で勝負をかけるしかない！

全ての属性がガラスの破片に集まる。

それが敵に襲う。

敵は僕の懷に飛び込もうとしてくるがガラスの破片によってそれは免れた。

だが僕に滅多切り攻撃。ガラスの破片でいくらか防御できたけど痛い。

結構ダメージを受け、身が裂け、結構ダメージを食らってしまった。

ティセナ「まだまだああああー」

敵は全ての技をいづらか使用し、僕の技の効果を消し去った。
もう、8時間はオリキャラの書では戦えない。
自分の技だけで戦うしかない。

もう絶体絶命だ。

シャーサク「ならこれしかない！『光の茨』」

詠唱破棄、詠唱ありじゃ敵に隙を与えてしまい、やられてしまう。
詠唱破棄でダメージを与えるしかない。
それでも光の棘よりは威力がある一撃。

僕のこの一撃で敵を食い止めてやる！

ティセナ「ぬりい、俺の実力はまだまだだあ『ダークシューティン
グスター』」

流れ星ではなく、巨大な光線を吐いていた。
吐く、出すんじゃないの。

人間型のモンスターかもしれない。
これだけの敵とは。

光の茨は一瞬にして消えてしまった。

シャーサク「も、もうダメだ！・・・」

僕は諦めかけた瞬間、綺麗な光が出現。
あれは・・・

第12話 ベスナの心

ベスナ「もう、森に襲わせない。スラ、ベス、ヒールスライム、行って・・・」

襲わせない、森から襲っているじゃん

それを倒しに行くのはいいでしょと私は思った。

那遊「じゃあなんで攻撃するの『刃吹雪風』」

私はローズロッドを掲げて弱い風を振り出した。

それは小さな刃のようにスライム達を切り刻む。

スライム達は悲鳴をあげ、どんどんシュッと消滅してゆく

スライムベス「ズラー『炎』」

スライムベスたちは一斉に炎を吐き出し、私たちに襲い掛かる。

炎は大きくなる・・・

雪原「あたしはゆきはらだからね♪貴方は自分だけ良い者だと思っている自己中ね。『染井吉野之舞早朝』」

雪原さん、よくいったですわ。

あのスライム確かに自己中。

人に襲いかかって自分の所には襲わないでなんて。

いや、もしかしたらあの金髪に森を襲われた可能性も!？
そんなわけですね。

雪原さんは鉄製の扇を無数に飛ばし、四方八方より敵を襲う。
スライム達はどんどん消滅

ベスナ「お願い、襲わないで、スライム達の死はもう見たくない！
『ブリザード』」

あのスライムベス、ブリザードまで使ってくる！？
低い氷魔法だけどスライムの癖なら凄い

ブロントさんが突進し、スライムに襲い掛かる！

ブロント「俺様のこの攻撃を見せてやる！『レッタブレード』」

ブロントは剣に大きい炎を宿す。
その炎で敵のスライムに襲う。

ブリザードは簡単にきえさり、ベスナに攻撃を仕掛けた。
ベスナは大きいダメージを受けていた。

ベスナ「お前達もティセアの仲間だ。ティセアの仲間だ。そうじゃ
なきゃ攻撃してこないはず」

今度はティセア（金髪）の仲間扱い。
やっぱりティセアがスライム達を襲った。
それしか考えられない。

那遊「正直に話して、どうやってティセアの奴に攻撃されたんです
か？」

ベスナは涙を流しながら言いかかった。
それはティセアに森を襲われた事
おじいちゃんを殺されたことなど・・・

ベスナ「そ、それほど何も出来ないかもしれない。でも自分の力で
森を守る。これしかない！」

ベスナちゃんは決心した。

ベスナ「この私の力でティセアをきつと倒す」

――ベスナはシャーサクさんの所に行く。
私たちもシャーサクさんの所に行く。
そしてシャーサクさんの所についた。

シャーサクさんが追い詰められていた。
だけどベスナさんは

ベスナ「ティセア、絶対貴方を倒す。」

シャーサクが見ていた光とはベスナの事だったんです。

第12話 ベスナの心（後書き）

スナの森編、次回で終わります。

第13話 ティセアを倒せ。終焉へ（前書き）

もうすぐ第2章のスナの森編完結。

第13話 ティセアを倒せ。終焉へ

ティセア「おのれえーベスナ」

ベスナ「許しません。ティセア。スライム達を使わずとも倒します。使って死なれるわけにも行きませんし『ブリザード』」

ベスナはブリザードでシャーサクに襲いつつあるティセアを襲う。

ティセアはベスナのほうに行き、ブリザードを消す。

シャーサク「お前の相手は僕だ！『光の棘』」

シャーサクは手をあげ、空間からいくつかの光の棘を出現させ、敵に切り刻む

ティセア「グルルルルーー！『暗黒乱舞斬』」

ティセアは巨大な遠吠えをあげ、ベスナに襲い掛かる。

シャーサクは光の棘で交戦したが歯が立たず、ベスナは切り裂かれ、滅多切りにされた……

ティセア「スライム皆殺しだあああ！！！！」

ティセアはスライム達を殺し続ける。

フロント「ダメだ。このスライム達は悪くない。魔王軍が罪のないスライム倒すとは……『疾風の剣・シュラツシュ改』」

フロントは強力な速い剣で3回連続で敵を切り裂く。

だが敵にとってまだまだ戦えるようだ。

那遊「私の大技までは使いませんわ。『桜花旋風』」

ティセアは諸にこの一撃を受け、幻惑で自分へ星剣スターダストで切り裂き続ける。

ティセアはぼろぼろにダメージを受け、ヤバイ状況らしい。

ティセア「ベスナの息の根を止めてやる！！『メテオインパクト』」

ティセア上空に高く飛び、ベスナを上から一刀両断する。

ベスナは今にも無残な姿のようだ。

そのベスナを粉々に刻んでいこうとした時

雪原が登場した！！！！

雪原「そんなスライムに襲うなんて。許さない。『昼間之奇妙訪問者』」

ティセアには隙があった。

雪原の攻撃でティセアは力尽きそう。

ティセア「仕方ない。退却だ。」

ティセアは煙球を出し、逃げる。

ベスナ「シャーサクさん。私達の森がどうやってティセアに襲われたか話しましょう。」

シャーサク「どんな事ですか。ベスさん。」

ベスナ「私はベスではなくてベスナで・す。」

スライムベスのベスナは倒れそう。

しかし、僕に話してくれた……

第13話 ティセアを倒せ。終焉へ（後書き）

次回はスナの森が何故襲われたかを書きます。
2回分ありますのでよろしく

第14話 プロローグinスナの森

ここはスナの森。スライムたちが多く生息している。
太陽は光線のように光り、草木が多く生息している。

slime; (スナ森のボス) 「ベスナ。俺が死んだらお前を森のボスと任命する。」

私はベスナ。ボスにこんな事を言ってくれた。

この森は平和。悪い者も居ない。

ずっと平和に続くと思っていた……

この夜。悲劇が起きた――

blont; (ティセア) 「うざいスライムたちを殺してやる」

何か異変が――

――来るわ。奇襲が……

blont; (ティセア) 「うりゃああー」

襲ってきた金の短髪の人 は 剣を振り回し、スライムたちに襲い掛かる。

こんな霊力。死んでしまう……

slime; 「うっ、うわあああああ!」

スライムは悲鳴を放ち、倒れた。

そして消滅した。

blont; (ティセア) 「やはり通常攻撃じゃきついかな『シューティングスター』」

空からたくさん隕石が猛スピードで襲ってきた!!

それらはスライム、スライムベス、回復スライム等に大打撃を与え、多くを死なせた。

slimebess; (ベスナ) 「や、やばいつ!」

私がやばいと思った時には手遅れに近い。
でも……

slime; (スナ森のボス) 「ベスナ、隠れなさい。このスナの森でも特に強いスライム軍団で行く」

ボスは沢山の攻撃力を持つスライム、魔法や耐久度が高いスライムベス、そして傷を癒す回復スライムを連れて行く。
敵は一人。こっちは大勢。

強さはわからないが多分勝てると思う♪

blont; (ティセア) 「こしやくな…『シューティングスター』」

また隕石が大量に降って来た……
スライムたちには大ダメージ。
回復スライムたちが生き残っている者へ大ヒール。
だが敵の方が有利かもしれない。

slime; (スナ森のボス) 「スナの森必殺の技だ『砂粘液』」

砂のように硬い粘液が飛び出した。

それらが空気に舞、敵の行動を少し封じた。

blont; (ティセア) 「お前がボスだな……『メテオインパクト』」

敵は上空に高く飛び上がった。

そして――

急降下。威力が増した、まるで隕石のような刀攻撃。

一気にボスはまっ二つ。

予想以上にダメージは高く、青い血が流れ出す。

濁流のようにこの血はあたりに積もる。

ボスは倒れ、回復できないほどの大ダメージだった……

つまり死んだと言う事。

第14話 プロログi nスナの森（後書き）

次の作品はエピソードi nスナの森。これを見ると次は待ち遠しいですよ。

最終話 エピソードinスナの森（前書き）

ついにスナの森編最終回

最終話 エピソード in スナの森

短い金髪の男がスナの森に現れ、ボスを殺してしまった。
私危ない！！

ティセア「お前らで俺の仲間になる奴集まれ、ならないうざい者は死刑だ」

仲間になってしまうもの、反抗して殺されるものなどがいた。
なんて巨悪なんだろう。人間って。

逃げるしかない。つかまったら次期ボスとして同盟を組み、命令を
全て聞くと言う条件なら殺されずに済むかもしれない！
でもほとんど不公平な不平等同盟だろう……

ティセア「まだ隠れている者がいるかもしれない。つれて来い。」

やっぱり、私は逃げる。どこまでも
2時間逃げた。

だが疲れてしまった。

ティセア「見つけたあ。殺してやる」

ベスナ「次期ボスの私を殺さないで下さい。」

私は言いかかった。

多分殺されるだろうなあと思いながら

ティセア「なら同盟を組もう。お前が命令を全て聞くとする条件で」

——やっぱり

ベスナ「有難うございます」

金髪男との同盟を組み、ティセア・フォレント（この金髪）の命令でいくつかのスライムを殺した。

そして忠実な部下どもだけ残った。

とりあはずこの森で私は2番目に権力が高い者となった。

人を襲うと言う命令をティセアに聞かされた。

その命令を多く遂行した——

これでベスナさんの話は終わった……

すぐ、ベスナさんは倒れた……

ベスナ「も……う、時間が来たかもしれない」

ベスナ死んじゃう。

僕、どうしよう

ベスナ「この怪我はどうしても治らないはず……」

シャーサク「ベスナさん。貴方の分まで頑張ります。」

ベスナは沢山のスライムとなり、消滅した・・・
僕達は先へ進む。

この悲しい物語がもう怒らない為にも

END*

＊第2章 スナの森。ティセアVSベスナ THE

最終話 エピソードi nスナの森（後書き）

いったん、物語は終わります。

しかし、すぐ新シリーズが出来ますので安心してください。

新シリーズ アドレス

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7513b/>

シャーサクの冒険記

2010年10月28日05時35分発行